

2025 年 10 月校長メッセージ「辞書を食べる話」

今から 50 年近い前のことになりますが、中学生だった頃、英語の先生から「昔の受験生は英和辞典を暗記して、覚えたページを順番に食べてしまうほど猛勉強をしたんだ」という話を聞かされたことがありました。手許にあったコンサイスの英和辞書をペラペラとめくりながら、こんな紙を食べたら、とてもまずいだろうなあと思いました。

9 月 5 日、6 日に開催した両国祭には大勢の方にご来校いただき、ありがとうございました。今年の高校 2 年生のクラス演劇の台詞の中に、「文系は辞書でも食べていけばよい」という趣旨のことばがあって、50 年前の思い出が蘇りました。本当に昔の人は辞書を食べた勉強していたのでしょうか。インターネットと AI を使って、辞書を食べた勉強した人を調べてみると、田中角栄、宮澤喜一、北原白秋、南方熊楠といった人たちの名前が上がりました。田中角栄は小学校時代の成績は優秀だったけれども、家が貧しくて中学校に進学できず、英和辞典を必死に覚えて勉強をした、その際に覚えたページは食べてしまったという伝説があるそうです。また、詩人の北原白秋は「言海」という辞書を 2 冊買い、そのうちの 1 冊のページを覚えると破り捨てていて、それをあたかも辞書を食べていると受け止められた、ということです。こうした有名人以外でも、辞書を食べる話はインターネット上にいくつもあり、知識を習得する覚悟、決意の表れのような扱われ方をされています。

「食べるぐらいに辞書の世界にのめり込む」というように解釈すると、「辞書を食べる」ことは、私のような国語の教師にとって、こんなに魅力的な時間はないでしょう。辞書の世界にのめり込んだ有名人といえば、「三省堂国語辞典」の編纂者であった見坊 豪紀（けんぼう ひでとし）の名前があがるでしょう。ケンボー先生と呼ばれる辞書編纂の神様のような人です。そして、そのケンボー先生の東京帝国大学文学部国文学科の同級生に山田 忠雄という人がいて、この方もケンボー先生と対極をなす辞書編纂の有名人です。この二人は最初は協力して「明解国語辞典」を編纂しました。ところが、やがて袂を分かつことになり、ケンボー先生は「三省堂 国語辞典」を編纂し、山田先生は「新明解国語辞典」という別々の辞書を編纂することになりました。

なぜ、この偉大な二人の国語学者が別々の国語辞書を編纂するに至ったのか。この二人の辞書編纂の道のりを丁寧に取材し、NHK のテレビ番組にするとともに、「辞書になった男 ケンボー先生と山田先生（文芸春秋社）」という著書として出版したのは、NHK のディレクターであった佐々木健一という人です。

ケンボー先生と山田先生が協力して編纂したのは、「明解国語辞典」という辞書で、昭和 18 年のことです。二人は東京帝国大学を卒業したばかりの無名な若者であったため、辞書の編纂者としては、恩師である金田一京助の名前が用いられました。金田一京助はアイヌ語の研究者として多大な業績を残された研究者ですが、明解国語辞典の実際の編纂には全く関わってはいなかったそうです。この明解国語辞典は、今の国語辞書では当たり前のことですが、初めて現代仮名遣いに基づいた「表音式」で引くこ

とができる辞書でした。戦前に出版された他の国語辞書は歴史的仮名遣いで見出しが区分されているため、「コウ」なのか「カウ」なのか、「クワウ」なのか「コフ」なのか、音だけで判断できず、きわめて引きにくかったのを、「引きやすいこと」を主眼として見出しを立てた辞書で、この画期的なアイディアを提唱したのが若きケンボー先生でした。

ケンボー先生は戦後に明解国語辞典改訂版を編纂し、さらに「表音式」であった見出しを現代仮名遣いへの改訂を進めるにあたって書名を「三省堂国語辞典」に改めて編纂し、昭和 35 年に初版を出版しました。この「三省堂国語辞典」は通称「三国」と呼ばれ、小型の国語辞典として最も高い信頼性により、その後の 13 年間で 561 万 5 千部を売り上げたといえます。

ケンボー先生は辞書を編纂するにあたって、「ことば」を集め、その用例をカードに書き記して保存していました。たった一人で 145 万語のことばのカードを生涯に残したとされています。「ことば」は、あまり変化しない長い時間同じ用例で使われるものから、流行語、はやりことばのように、ほんの一時期だけに使われすぐに死語となるもの、海外から日本に入ってきて外来語として定着するものなど、さまざまな性格をもっています。辞書にそれらの「ことば」を反映させるために、ケンボー先生は毎日、どんなときでも、新しい「ことば」が出現していないか、その用例はどうなっているかを短冊状のカードに書き止め、記録していました。まさに「辞書の世界」「ことばの世界」にのめり込んでいたと思います。

ケンボー先生の辞書づくりの基本的な考え方が、三省堂国語辞典第三版序文に書かれています。少し引用しますと「さて、辞書は“かがみ”であります——これは著者の変わらぬ信条です。辞書は、ことばを写す“鏡”であります。同時に辞書は、ことばを正す“鑑（かがみ）”であります。“鏡”と“鑑”の両面のどちらに重きを置くか、どう取り合わせるか、それは辞書の性格によってさまざまでありましょう。ただ、時代のことばと連動する性格を持つ小型（小規模）の国語辞書としては、ことばの変化した部分については“鏡”としてすばやく写し出すべきだと考えます。“鑑”としてどう扱うかは、写し出したものを処理する段階で判断すべき問題でありましょう。」とあり、辞書を「かがみ」と考えていたケンボー先生の思想の根幹を知ることができます。

ケンボー先生と山田先生とが、別々の辞書を編纂するようになっていった経緯は、こういったケンボー先生の辞書に対するきわめて高い理想と、辞書をできるだけ多く売って利益を上げる必要がある出版社の都合、辞書編纂に対して別の考え方をもっていた山田先生が、自分の考えに基づいた辞書をつくりたいという思いとが交錯した結果であるように感じます。

明解国語辞典改訂版が出版されてから 15 年にわたり、明解国語辞典の第三版が出版されることがありませんでした。ケンボー先生は「三省堂 国語辞典」の編纂に力を入れていて、明解国語辞典まで手が回らず、明解国語辞典の編纂の中心は山田先生に移っていきました。山田先生の辞書づくりは、全く新しい国語辞典をつくり上げると

いう考えに基づいて行われました。特に当時の辞書編纂が、他社辞書からの剽窃や切り貼りによって語釈が書かれていたことに対する山田先生の痛烈な批判が強く辞書編纂に反映されたと思われます。ことばを「言い換え」で語釈するのではなく、「文による語釈」を多く取り入れるという山田先生の考えによって、明解国語辞典は「新明解国語辞典」として全く新しく生まれ変わり、その語釈の独自性と思ひも寄らない表現内容から「新解さんの謎 赤瀬川源平著（文春文庫）」というエッセイまで生まれ、現在最もよく売れる国語辞書となっています。

「新明解」の語釈は、学者やマスコミからも批判されることもありましたが、山田先生はことばのもつ多義性や、ことばの背後にある本当に伝えるべき意味へのこだわりから「新明解」を編纂しています。「辞書は文明批評」という山田先生の考えが残っており、「辞書はかがみ」と考えるケンボー先生との違いが語釈や用例となって表れました。「辞書になった男 ケンボー先生と山田先生」の中でも、同じことばの語釈を「三国」と「新明解」とでは、それぞれどのように表現しているのか、比較対照していて、それぞれの辞書の性格がはっきりと分かることができ、非常に面白く感じます。

辞書をつくる苦労を描いた小説「舟を編む 三浦しをん著（光文社文庫）」はNHKでドラマになりました。以前に映画にもなりました。「舟を編む」は、出版社の編集担当が中心となって辞書をつくる話となっていて、これは作者が取材したのが広辞苑をつくっている岩波書店のやり方だからだろうと「辞書になった男」では述べられています。出版社によって辞書づくりのやり方も異なるのでしょう。

辞書を編纂する人の話を書きましたが、辞書はそれだけのめり込むことができることばの海だと思います。「辞書を食べる」と言われることは、その人にとって、最高の誉め言葉であるに違いありません。

[2025 年 9 月校長メッセージ 「恐竜の死体が化石化するプロセス」](#)

[2025 年 8 月校長メッセージ 「グラフを発明したのは誰か」](#)

[2025 年 7 月校長メッセージ 「早朝の両国にいるオナガは一体どこから来るのか」](#)

[2025 年 6 月校長メッセージ 「現代社会における霸道と王道」](#)

[2025 年 5 月校長メッセージ 「おいしいラッシーの作り方」](#)

[2025 年 4 月校長メッセージ 「『NEXUS 情報の人類史』を読んで考えたこと」](#)